

## 十勝岳の火山活動解説資料（令和8年5月）

札幌管区気象台  
地域火山監視・警報センター

62-2 火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では噴煙・噴気が多く、特に 62-2 火口付近はごく微弱な発光現象が時々みられるなど、活発な熱活動が続いています。

3月以降、山体を挟む一部の GNSS 基線でわずかな伸びがみられ、62-2 火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、振子沢噴気孔群の噴気域の拡大が認められています。

火山活動はわずかに高まる傾向にあり、今後の推移には注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

## ○活動概況

## ・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3～10、表1）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いており、今期間も噴煙・噴気が多く、噴煙の高さは最高で火口縁上900mまで上がりました。大正火口の噴気の高さは100m以下、振子沢噴気孔群の噴気の高さは稜線上概ね300m以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴気は2018年頃からやや高い状態が続いています。

今期間、62-2火口付近でのごく微弱な発光現象（火映を含む）を高感度の監視カメラにより複数回観測しました。この現象は、62-2火口付近での高温のガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられ、2020年6月以降時折観測されています。

11日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、振子沢噴気孔群で、昨年の観測（2025年8月12日）と比べて活発な噴気域の拡大及び高温化が認められました。また、前十勝北西側斜面では、昨年の観測と比べて地熱域のわずかな拡大が認められました。

## ・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-⑤～⑦、図11～13）

火山性地震は多い状態で経過しました。震源は主に62-2火口のごく浅い所、旧噴火口付近及びグラウンド火口付近の深さ0km～深さ1km付近に分布しました。

31日から6月1日（期間外）にかけて、62-2火口付近のごく浅い所を震源とする火山性地震が一時的に増加しました。地震活動は、2026年4月頃から次第に高まっており、一時的な回数の増加も時折認められています。

26日及び30日に振幅が小さく継続時間が短い火山性微動がそれぞれ1回発生しました。

## ・地殻変動の状況（図14～15）

GNSS連続観測では、2021年以降、62-2火口付近の観測点を中心に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められていません。一方、山体を挟む一部の基線では、2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びの変化が認められます。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/ki-shou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイトル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

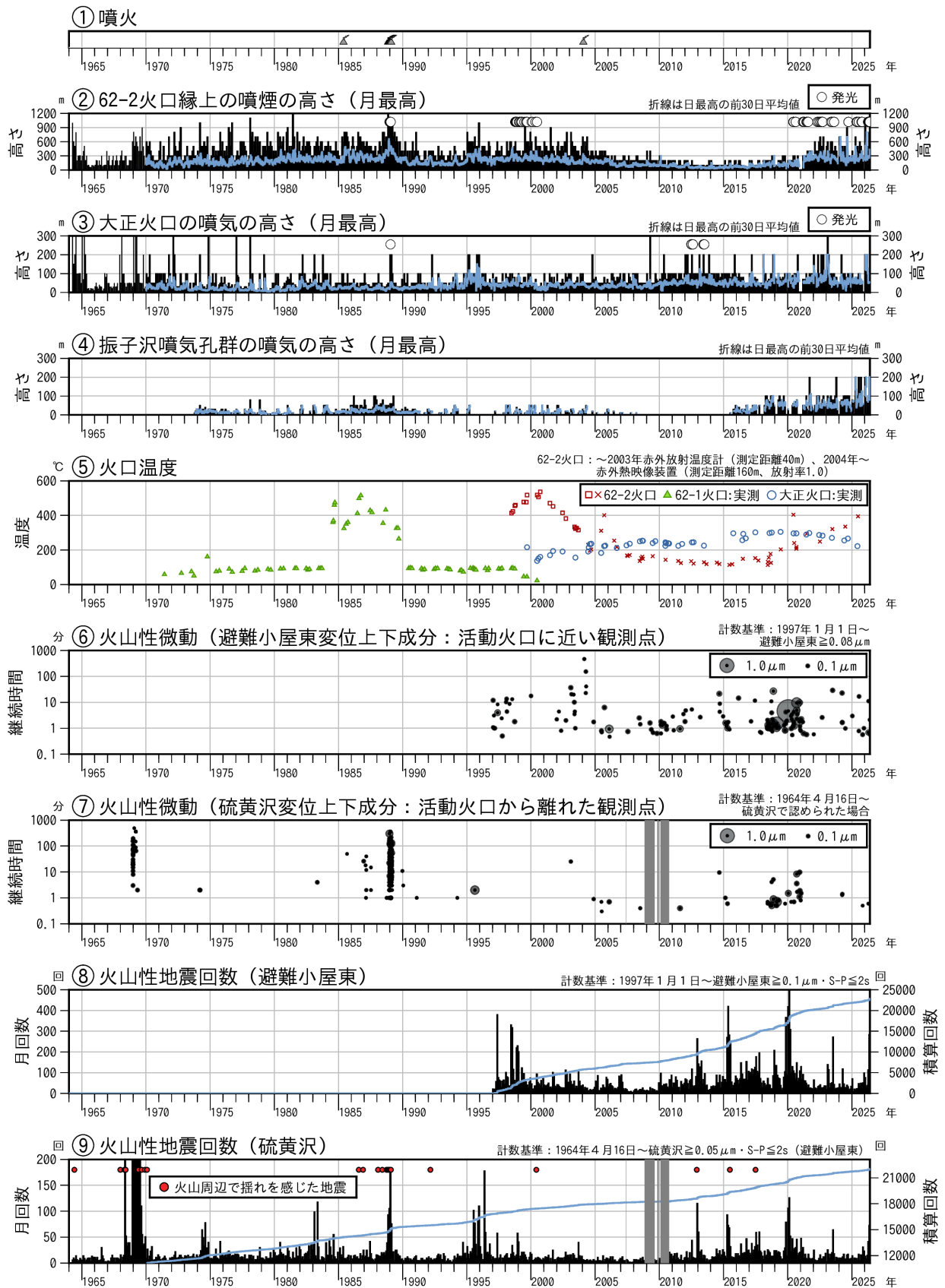


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2026年5月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。  
⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

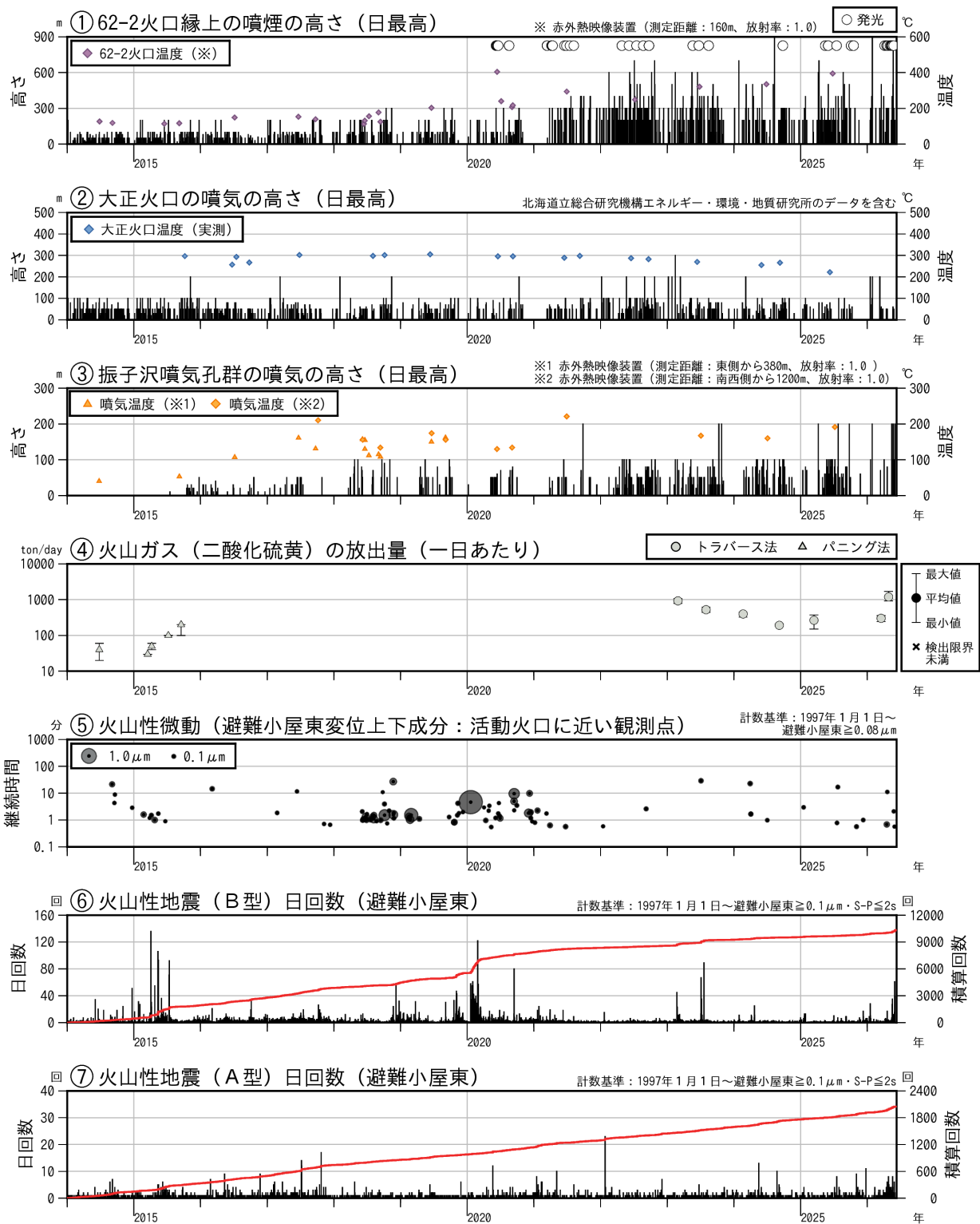
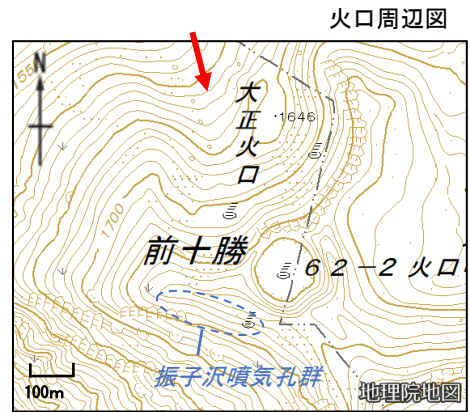


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2026年5月）

⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所（図13参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。



→: 監視カメラの撮影方向

図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

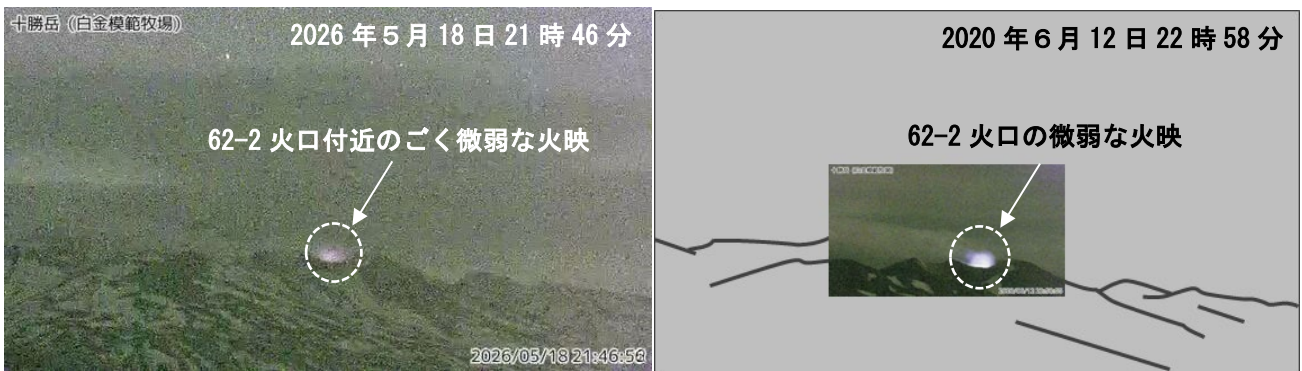


図4 十勝岳 62-2 火口付近で観測された発光現象（火映）（白金模範牧場監視カメラによる、撮影方向は図3と同様）

左：18日に観測されたごく微弱な火映

右：2020年6月12日に観測された微弱な火映（6月7日～19日の夜間、断続的に観測）

表1 十勝岳 2026年5月に観測された62-2 火口付近の発光現象（山麓に設置された高感度の監視カメラによる）

※1：発光現象により火口上の雲や噴煙が明るく照らされた現象を観測した場合には、火映として表記している。

観測日	発光現象※1	発光現象の強度、発生状況
6日夜	火映	ごく微弱
11日夜	発光現象	ごく微弱
12日未明	火映	ごく微弱、断続的
13日夜	火映	ごく微弱、断続的
15日夜～16日未明	火映	ごく微弱、断続的
16日夜～17日未明	火映	ごく微弱、断続的
17日夜～18日未明	火映	ごく微弱、断続的
18日夜～19日未明	火映	ごく微弱、断続的
26日未明	火映	ごく微弱、断続的



図5 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向 (矢印)



図6 十勝岳 火口周辺の状況

西側上空 (図5の①) から撮影

・62-2 火口及び振子沢噴気孔群では、活発な噴気活動が認められました。

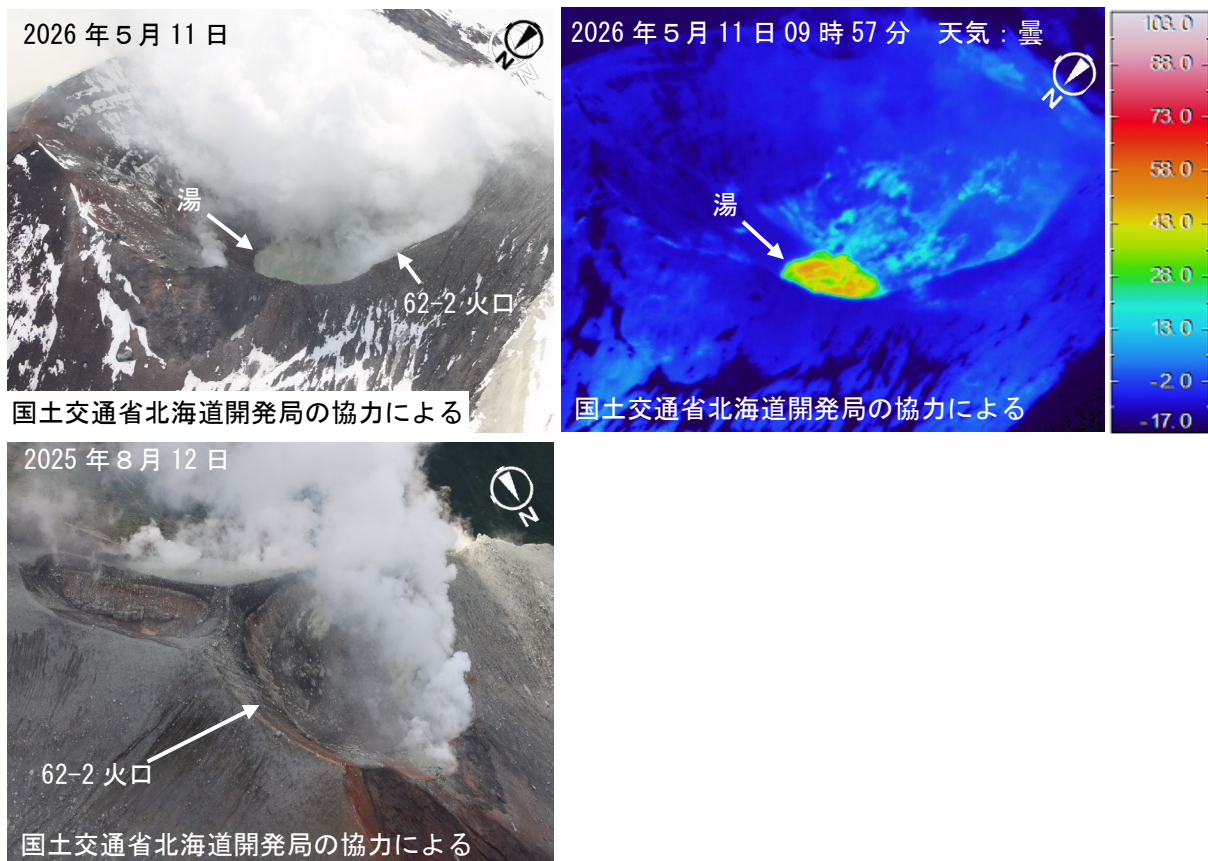


図7 十勝岳 赤外熱映像装置による62-2火口の地表面温度分布  
 上：北西側上空（図5の②）から撮影 下：北東側上空（図5の③）から撮影  
 ・62-2火口底には、湯がたまっていました。

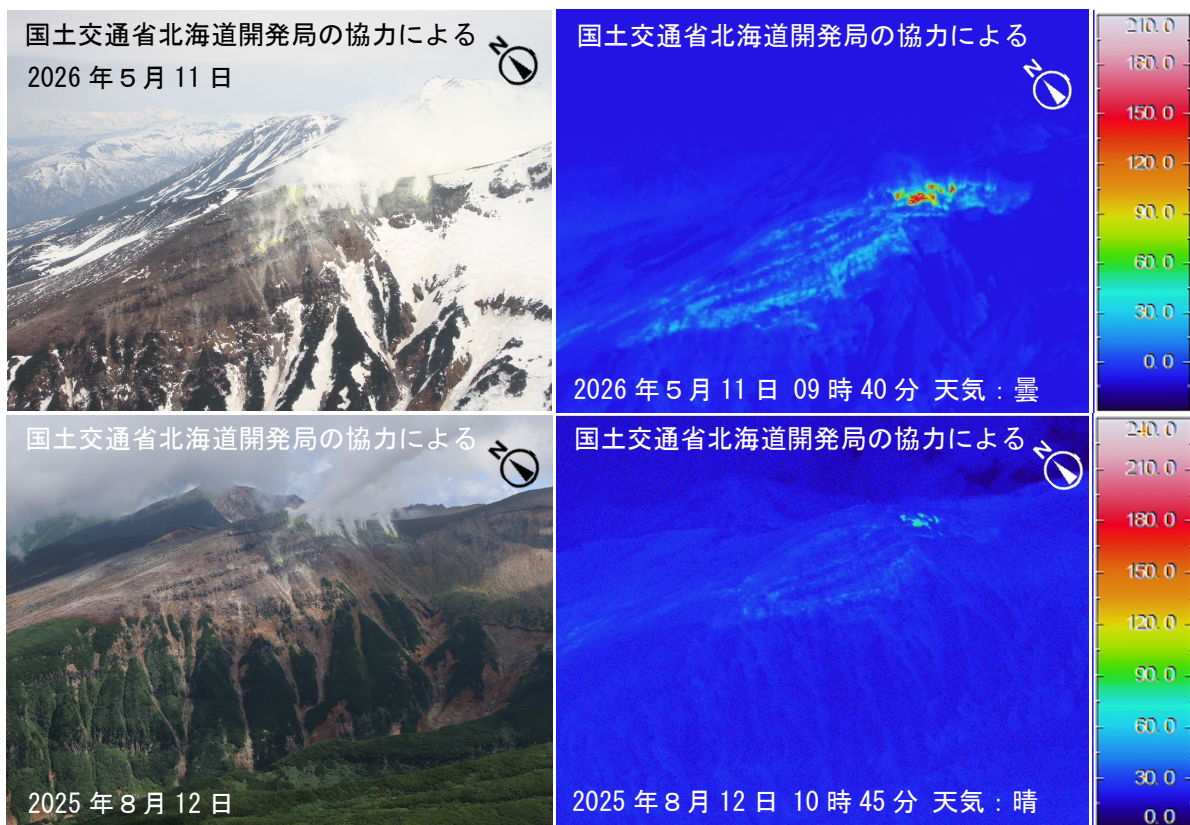


図8 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布  
 上：南西側上空（図5の④）から撮影 下：南西側上空（図5の⑤）から撮影  
 ・2025年8月12日の観測と比べて、活発な噴気域の拡大及び高温化が認められました。

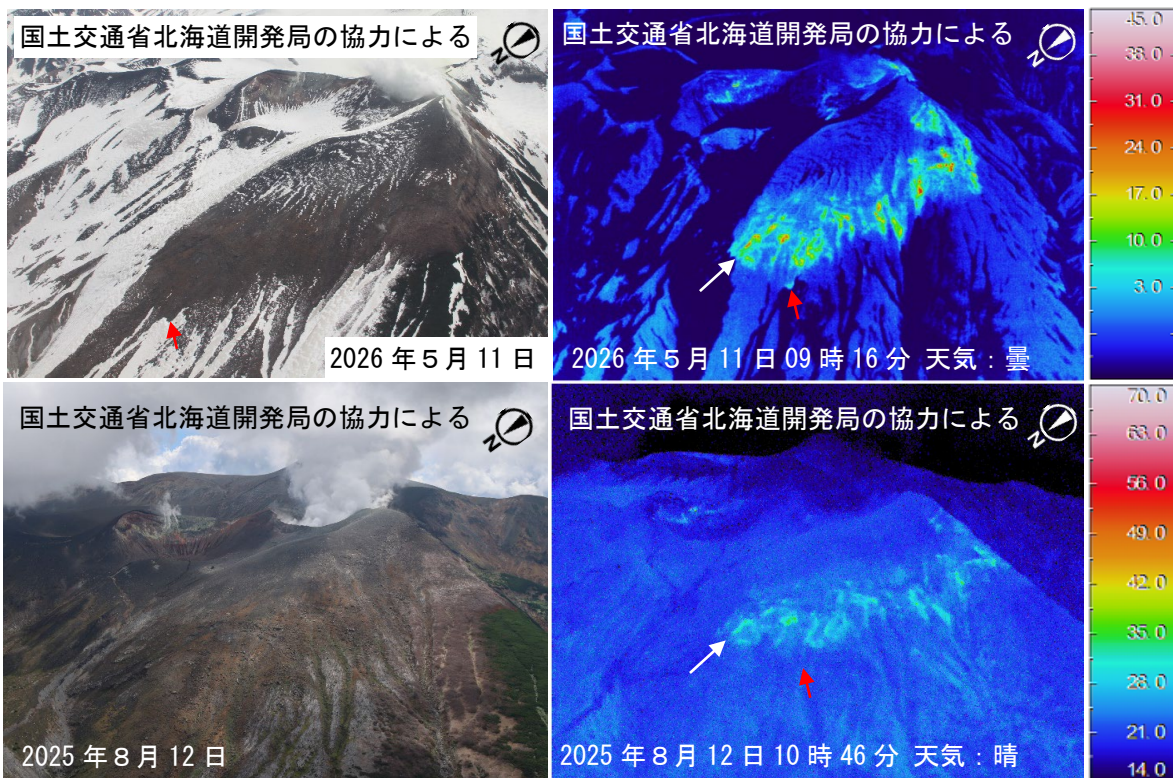


図9 十勝岳 赤外熱映像装置による前十勝北西側斜面の地表面温度分布  
 上：北西側上空（図5の⑥）から撮影 下：北西側上空（図5の⑦）から撮影  
 図中の白矢印は同じ場所を示す。  
 ・2025年8月12日の観測と比べて、地熱域のわずかな拡大が認められました（赤矢印）。

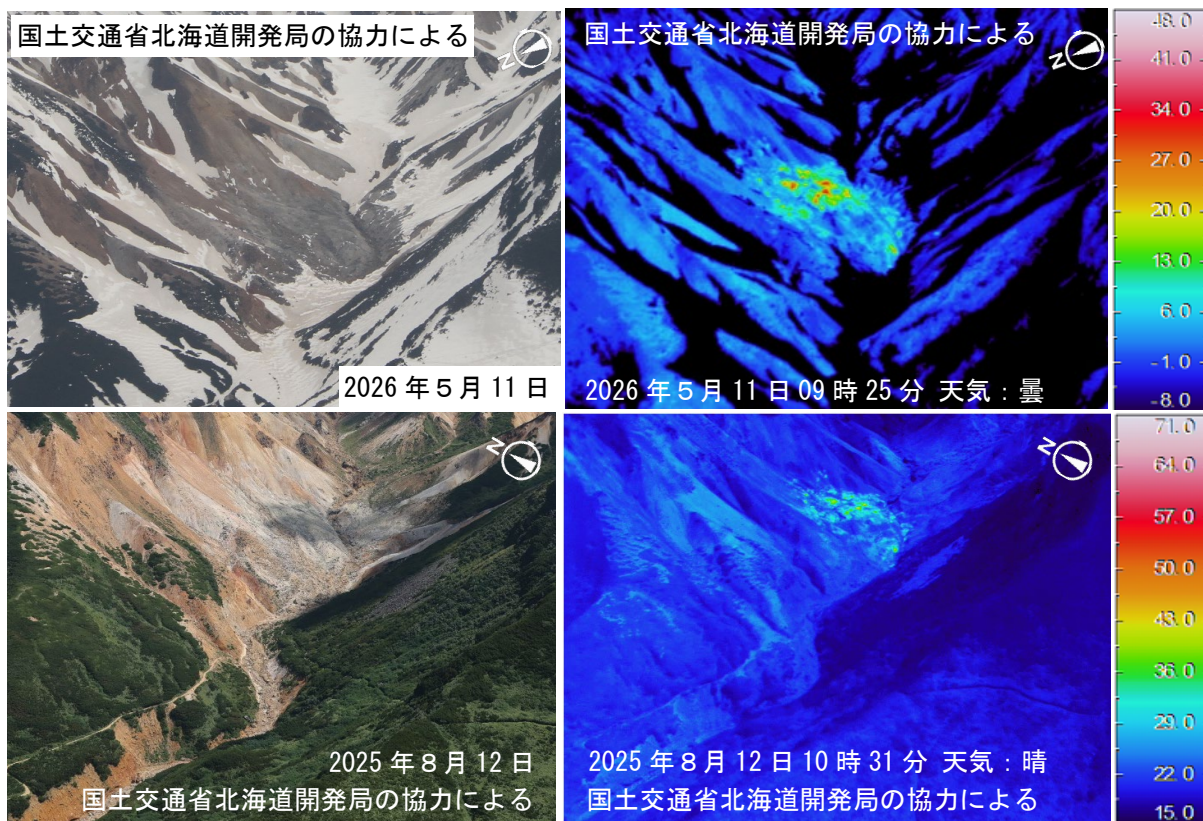


図10 十勝岳 赤外熱映像装置による旧噴火口の地表面温度分布  
 上：西側上空（図5の⑧）から撮影 下：西側上空（図5の⑨）から撮影  
 ・2025年8月12日の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

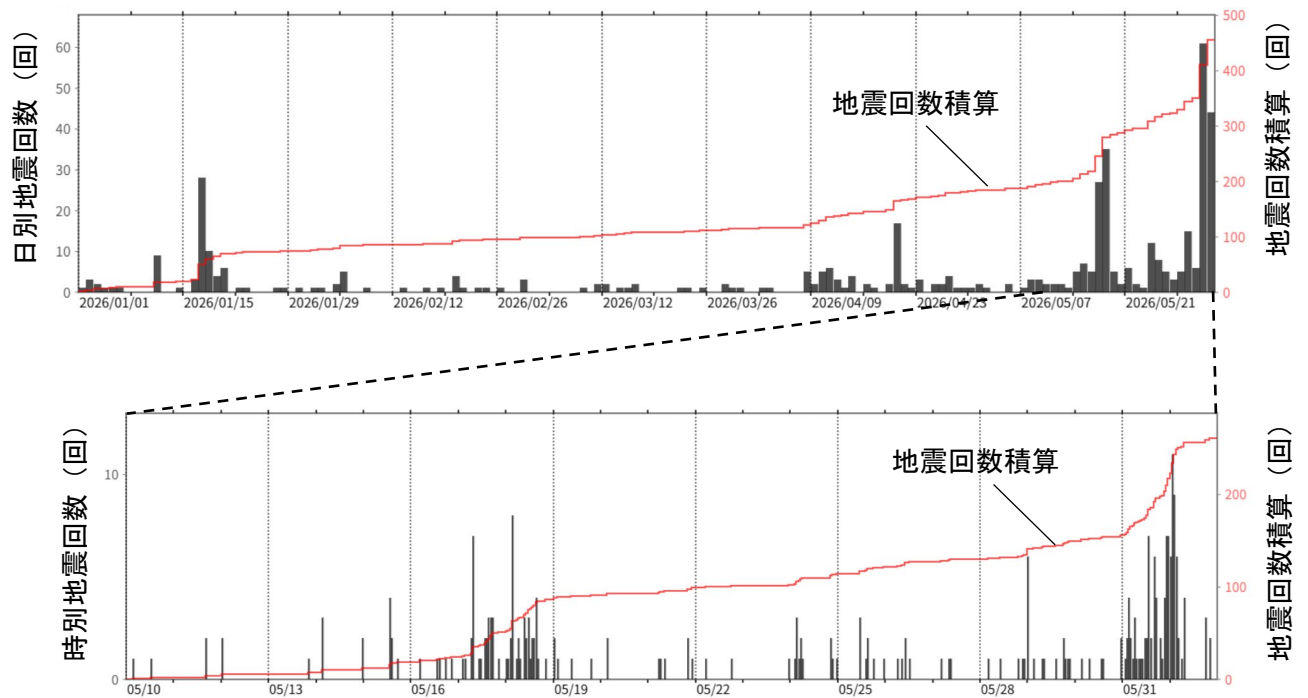


図 11 十勝岳 火山性地震の発生状況

上：日別地震回数 (2026年1月1日～6月1日 (期間外))

下：特別地震回数 (2026年5月10日～6月1日)

いずれも 62-2 火口付近のごく浅い所を震源とする火山性地震の回数

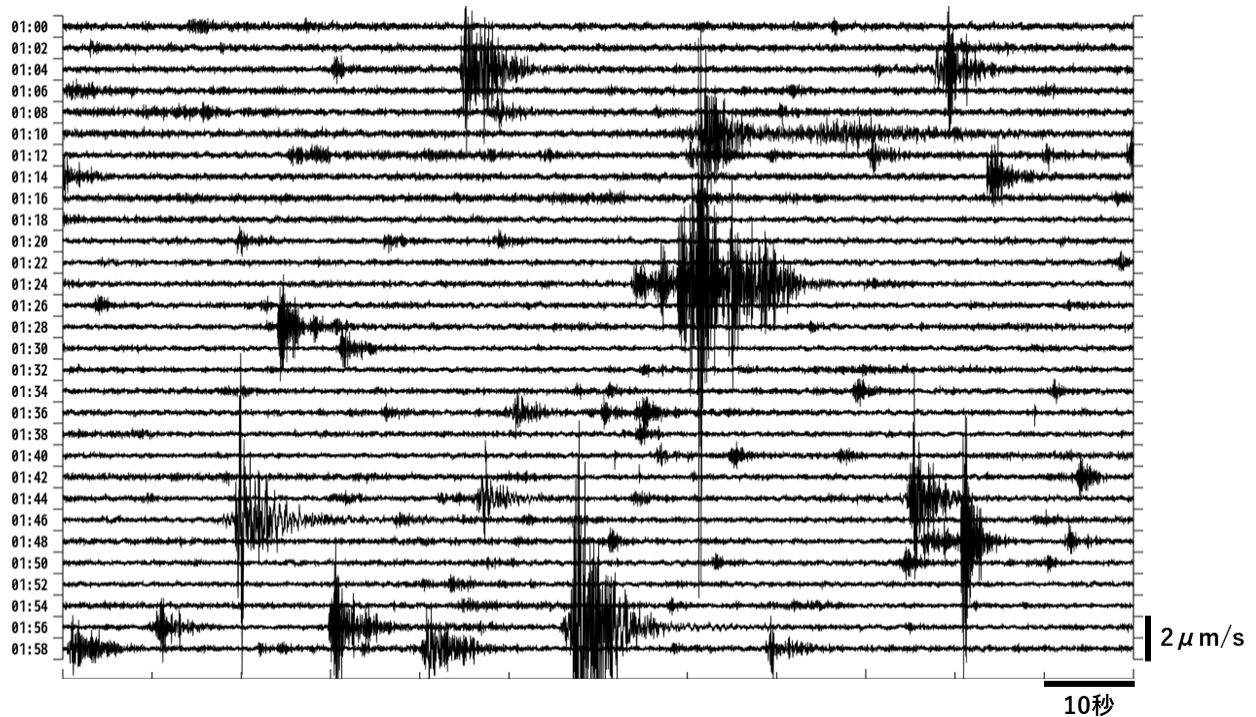


図 12 十勝岳 避難小屋東観測点の上下速度波形 (6月1日01時00分～02時00分)

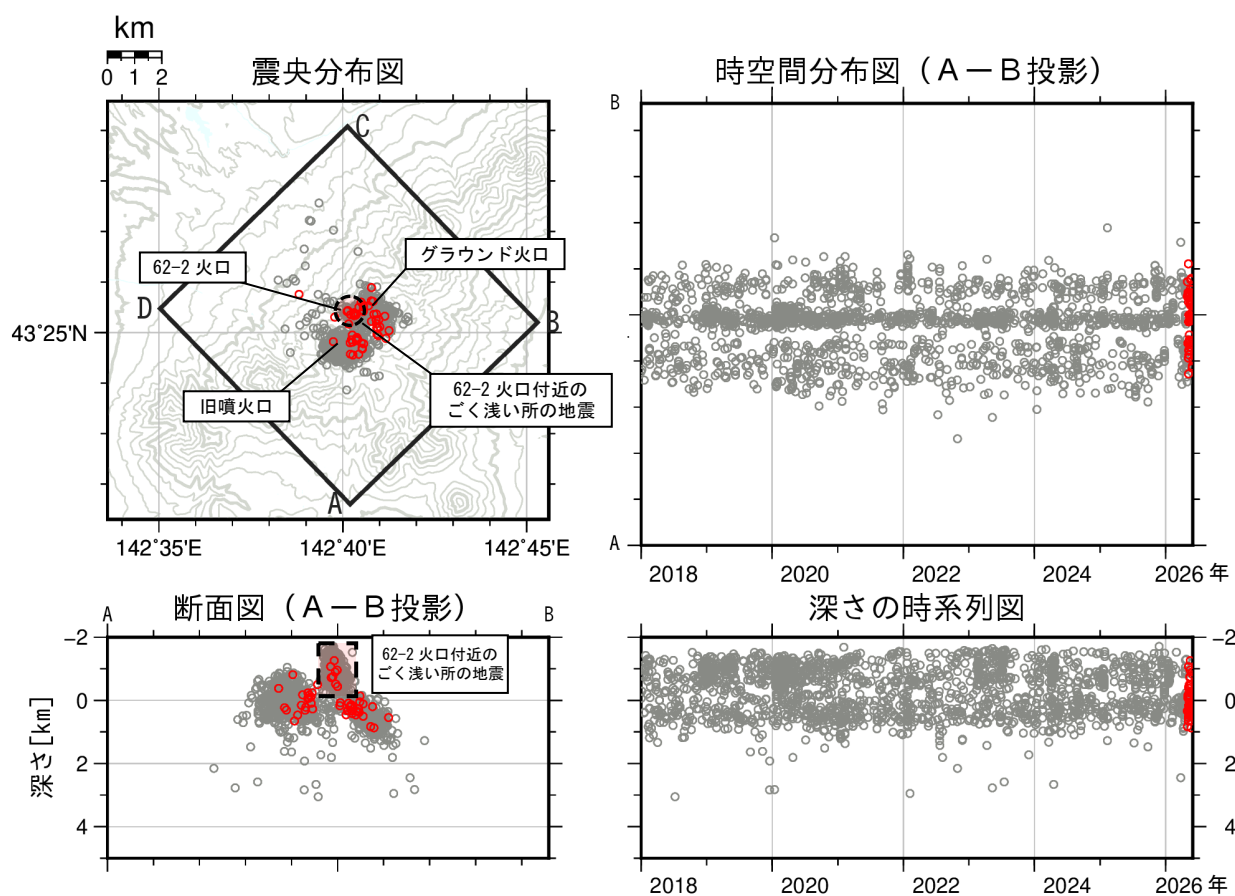


図13 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年5月）  
 ○：2018年1月～2026年4月の震源 ○：2026年5月の震源

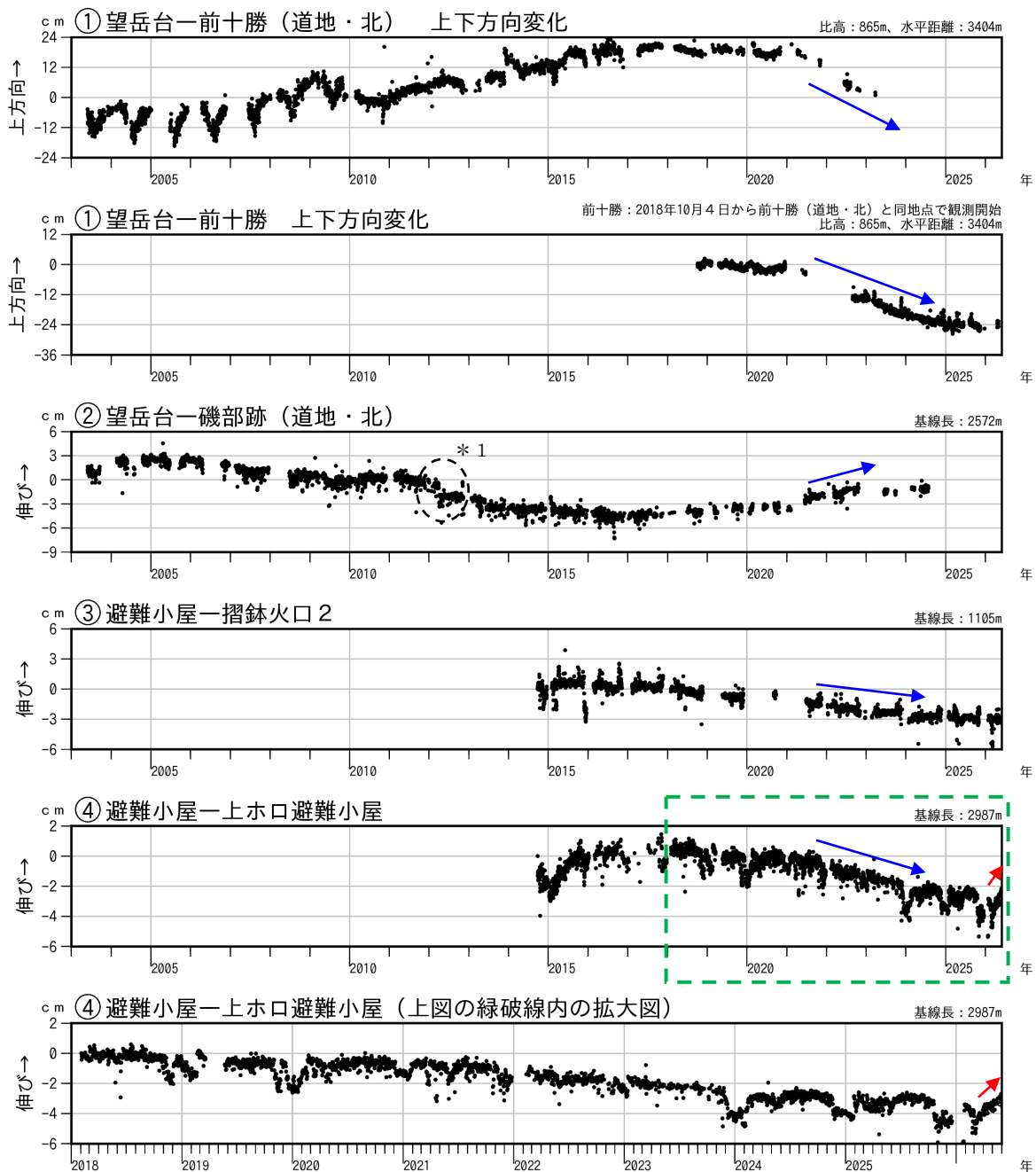


図14-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2026年5月）

グラフ①～④は観測点配置図（図15）の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

\* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（青矢印）が観測されていましたが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められません。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びの変化（赤矢印）が認められます。

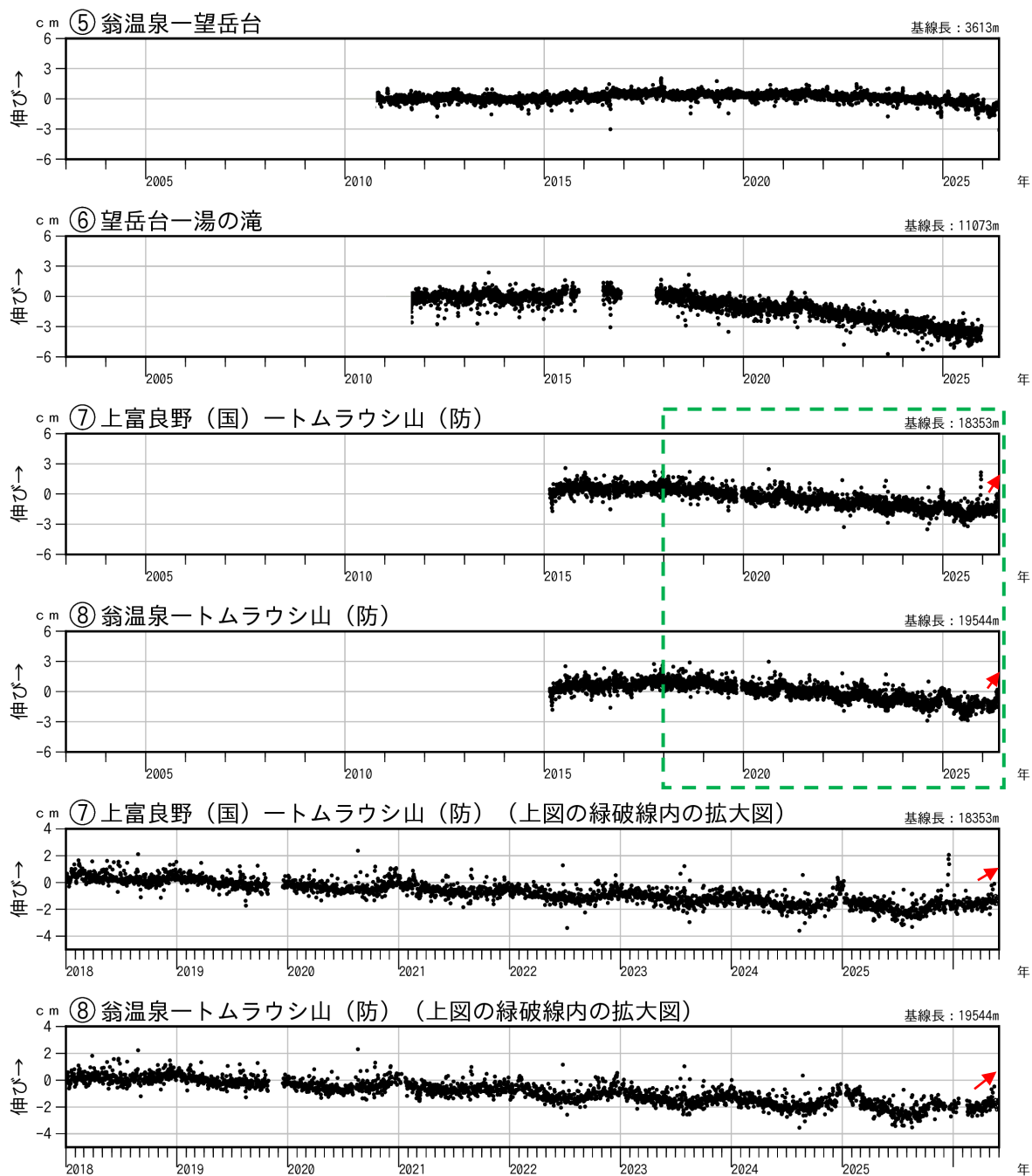


図14-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化（2003年5月～2026年5月）

グラフ⑤～⑧は観測点配置図（図15）の基線⑤～⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると思われる変動がみられる基線があります。

- ・ 基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていましたが、2026年3月頃からは伸長傾向に転じています※（赤矢印）。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※ 例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

